

前回男性ヴォーカリストの声質を紹介したのに続き、今回は女性ヴォーカリストの声質の違いについて解説してみたいと思います。

声質には色々な軸があります。私の考えるところでは、女性ヴォーカルについてはこんな方向が考えられると思います。

1 黒人らしい太く重い声 VS 白人らしい明るく繊細な声

女性シンガーの中で最も黒人らしい、迫力のある太い声の持ち主といえば、やはりサラ・ヴォーンでしょう。クリフォード・ブラウン(tp)と吹き込んだLullaby of Birdlandの名唱を聴いてください。喉がとても大きく空いていて、声に「重力」があると感じます。ジャズを歌うために生まれてきたような声ですよ。

<https://www.youtube.com/watch?v=x8cFdZyW00s>

もうひとり、カサンドラ・ウィルソンも黒人らしい声として挙げておきましょう。最近スタンダードを歌わなくなってしまいましたが、若い頃に吹き込んだスタンダード集が良いです。Polka Dots And Moonbeamsを聴いてください。

<https://www.youtube.com/watch?v=St054H2uKdM>

日本人の中には、こういう声質が苦手で、白人女性シンガーを主に聴くという方も少なくないですよ。まずは、ジュディ・ガーランドの出世作Over The Rainbowを聴いてみましょう。(英語ではない歌詞が表示されますが、広告が少ないのでこの動画にしました)

<https://www.youtube.com/watch?v=PSZxmZmBfnU>

このイメージが強いので、ガーランドは細く、高い声の持ち主というイメージを持っていましたが、バーブラ・ストライサンドと一緒にTVショーで歌っている動画を見ると、かなり違った印象になりました。ストライサンドの方が高く、細い声で、ガーランドはそれより低く、若干太い声に聴こえます。比べると色々なことが見えてきて面白いです。ちなみに自分はストライサンドが好きです。

<https://www.youtube.com/watch?v=5Euvz1s70iQ>

現役シンガーでいうと、声質に癖がなく標準的な白人女性の声という感じがするのはイタリア人のロバータ・ガンバリニでしょうか。何度も来日していますし、人気があります。曲はThe Shadow Of Your Smile (いそしぎ) です。

https://www.youtube.com/watch?v=QJc_fCSxz2w

声の方向が違いますが、ステイシー・ケントの声も好きですね。いわゆるカワイイ声、コケティッシュな感じのする声です。そして英語の発音が独特で気持ちがいいです。One Note Sambaです。

<https://www.youtube.com/watch?v=PYdrhTL3VBk>

2 エッジが効いた声とハスキーな声

男性シンガーの声質を解説した際に、エッジが効いた声の代表としてシナトラを紹介しました。母音の立ち上がりは鋭くて非常にメリハリがある声です。女性シンガーでは誰がいるだろうと調べたら、やはりこの人でしょうか。カーメン・マクレエは黒人ですが、サラ・ヴォーンのような声質とは違い、シナトラに似たものを感じさせます。36分14秒辺りから始まるOld Devil Moonにその声の特徴がよく現れています。

https://www.youtube.com/watch?v=e_oa5Es7xQA

さて、ハスキーな声といえば、自分が最も好きなシンガーの一人であるジュリー・ロンドンをやっぱり挙げたくなりますね。ジャズシンガーとは言えないのですが、ポップスだけでなくスタンダードもたくさん歌っていて、ハスキーかつ低音の魅力がたまらないです。残された音源はアレンジも素晴らしく、LydianでBGMとしてかけていて、これは誰ですかとよく聞かれることがあります。

ハスキーヴォイスの女性シンガーといえばヘレン・メリルが有名ですが、メリルより音域が低いのが自分好みです。大ヒットしたCry Me A Riverを聴いてください。音源はたくさんあるので是非他の曲も検索してみてください。

<https://www.youtube.com/watch?v=LbwjQSBH0sE>

1950～60年代にかけて活躍したローズマリー・クルーニーの声も魅力的です。1963年に吹き込んだガーシュインのSomeone to Watch Over Meを聴いてください。若干のハスキーさがある柔らかなさを感じさせる、惹きつけられる声です。
https://www.youtube.com/watch?v=2bj_c66kH-Y

3 ビブラートのかけ方

声質そのものではありませんが、聴き手の印象を大きく左右するのがビブラートのかけ方です。ビブラートとは声を伸ばす時に、ピッチを上下に揺らす技法ですが、1秒間に10回近くも揺らすような、いわゆる縮緬ビブラートと呼ばれる歌い方もありますし、ジャズではありませんが、演歌歌手の天童よしみさんのように、1秒に3、4回大きく揺らす人もいます。

縮緬ビブラートの代表がアニタ・オディです。Beautiful Love
<https://www.youtube.com/watch?v=VjLYoTR8cDE>

ビブラートが抜群にうまいと感じるのが、主にポップスの分野で70年代から活躍したリнда・ロンシュタットです。80年代にジャズの名アレンジャーであるネルソン・リドルのオーケストラをスタンダード集を録音して大ヒットしました。

この人は明るさ、軽さ、鋭さもあって、素晴らしい声の持ち主なのですが、ビブラートのテクニックも非常にすぐれています。普通はシンガーによってビブラートの細かさはあまり変わらないのですが、この人のビブラートは、速いかけ方からゆっくりしたビブラートまで自由自在なところがすごいです。What's Newのようなバラードを聴くと、その使い分けがよく分かると思います。

低く短めの音符では比較的細かく揺らし、長い音符、高い音では大きくたっぷりと揺らします。同じ息の音符でも最初はビブラートをかけずに始めて（これは難しいんです）途中からかけるなんていうのもお手の物。3分29秒からの音符はノンビブラートで始まり、34秒くらいからビブラートをかけ始めます。とても気持ちが良いです。
<https://www.youtube.com/watch?v=Hx5ENGRPEsg>

こうした声質の違いは、持って生まれた声帯や気道の形などから来るところが大きいのですが、興味深いのは同じシンガーでも加齢によってかなり変わってくることがあるという点です。Lydianに定期的に出演頂いている平賀マリカさんが、「最近低い声が出るようになってきたんですよ」とMCで仰っていましたが、改めて今回何人もの歌い手を聴いてきて、確かに変わることがあると思いました。ガーランドも、オーバー・ザ・レインボウを歌った17歳の時の声と、TVショーに出演した時の声が変わっているのも当然でしょうね。

典型はサラ・ヴォーンです。上に挙げたLullaby of Birdlandは30歳の時の録音ですが、これを聴いてから1981年（57歳）のライブ録音を聴くと、かなり印象が違うのが分かると思います。
<https://www.youtube.com/watch?v=VpgFiCekb04>

この中でFascinating Rhythmを歌っていますが、8分30秒くらいからの、ドスの効いたでも表現したくなる低音域の迫力がすごいと感じます。サラはかなりタバコも酒も嗜んだと言われてますから、その影響もあるかもしれませんが、若い頃の声とは明らかに変わっています。

色々な女性シンガーの声質をご紹介します。声質に注目して聴くと、今までとは違った聴き方ができるのではないかと思います。そうした音源を色々聴いて、自分好みの歌手をみつけていくのも楽しいプロセスですよ。

自分の場合は、やっぱりエラ・フィッツジェラルドがベンチマークであり、ここに帰っていきますね。